

キリストのみ名で直談判

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書 詩編102編

- 1:【祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩。】
- 2:主よ、わたしの祈りを聞いてください。この叫びがあなたに届きますように。
- 3:苦難がわたしを襲う日に／御顔を隠すことなく、御耳を向け／あなたを呼ぶとき、急いで答えてください。
- 4:わたしの生涯は煙となって消え去る。骨は炉のように焼ける。
- 5:打ちひしがれた心は、草のように乾く。わたしはパンを食べることすら忘れた。
- 6:わたしは呻き／骨は肉にすがりつき
- 7:荒れ野のみみずく／廃虚のふくろうのようになった。
- 8:屋根の上にひとりいる鳥のように／わたしは目覚めている。
- 9:敵は絶えることなくわたしを辱め／嘲る者はわたしによって誓う。
- 10:わたしはパンに代えて灰を食べ／飲み物には涙を混ぜた。
- 11:あなたは怒り、憤り／わたしを持ち上げて投げ出された。
- 12:わたしの生涯は移ろう影／草のように枯れて行く。
- 13:主よ／あなたはとこしえの王座についておられます。御名は代々にわたって唱えられます。
- 14:ださい。恵みのとき、定められたときが来ました。
- 15:あなたの僕らは、シオンの石をどれほど望み／塵をすら、どれほど慕うことでしょう。
- 16:国々は主の御名を恐れ／地上の王は皆、その栄光におののくでしょう。
- 17:主はまことにシオンを再建し／栄光のうちに顕現されます。
- 18:主はすべてを喪失した者の祈りを顧み／その祈りを侮られませんでした。
- 19:後の世代のために／このことは書き記されねばならない。「主を賛美するために民は創造された。」
- 20:主はその聖所、高い天から見渡し／大空から地上に目を注ぎ
- 21:捕われ人の呻きに耳を傾け／死に定められていた人々を／解き放ってくださいました。
- 22:シオンで主の御名を唱え／エルサレムで主を賛美するために
- 23:諸国の民はひとつに集められ／主に仕えるために／すべての王国は集められます。
- 24:わたしの力が道半ばで衰え／生涯が短くされようとしたとき
- 25:わたしは言った。「わたしの神よ、生涯の半ばで／わたしを取り去らないでください。あなたの歳月は代々に続くのです。
- 26:かつてあなたは大地の基を据え／御手をもって天を造られました。
- 27:それらが滅びることはあるでしょう。しかし、あなたは永らえられます。すべては衣のように朽ち果てます。着る物のようにあなたが取り替えられると／すべては替えられてしまいます。
- 28:しかし、あなたが変わることはありません。あなたの歳月は終ることがありません。」
- 29:あなたの僕らの末は住むところを得／子孫は御前に固く立てられるでしょう。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

今日いただいた詩篇102編は、「祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩」というタイト

ルがついています。関根正雄訳ですと「悩めるものが絶望して、そのなげきを神の前に注ぎだしたときの祈り」と訳されています。いずれにせよ、このタイトルを読んだだけで、私は大いに慰められる思いがします。心挫け、悩み、絶望しきった人々の嘆きを聴いてくださる神様がおられる。このことを信じていることができるならば、その信仰は絶望も孤独も乗り越えてゆく確かな力となってくれるからです。

イエス様は、搾取したり、抑圧したり、支配する側、つまり「強者」の立場からは、お話しをなさいませんでしたし、行いにおいてもそうでした。弱っている人、くじけて立ち止まっている人のお尻をはたいて、泣くな、しっかりしろ、頑張れ、進め、悔しかったら上を目指せ、こういった強者の理屈をイエス様は絶対に言いません。そうではなくて、どんな嘆きだろうと絶望だろうと、私たちが注ぎだした言葉を聴いてくださる天のお父様の大きさ、深さ、優しさをわたしたちに教えてくださいました。心挫けて、悩み、絶望し、嘆きの中で暮らしている人々に、「神の国」の福音を伝えて、天の神を「アツバ(おとうちゃん)」と呼んでよい、子どものように願うことを何でも神様に祈ってよい、あなたがたは私の兄弟姉妹だし神の子なのだよと教えてくれたイエス様は、このことだけをとても「救い主」との栄光ある称号を受けるにふさわしいお方だと思のです。

強い者たちに押さえつけられ、痛めつけられ、切り捨てられてきた人々が、他者を信じ、信頼することはとても難しいことです。神すら信じられない気持ちになってもおかしくありません。人はときに、そんな思いを持つものであることをイエス様はよく知った上で、あなたたちは、心の中にあるどんなことでも、私の名によって天の父に祈ってよいし、天の父があなたがたを苦悩の日々から完全に開放してくださる時が必ず来るから安心して欲しいと、いつの世も聖書を通して語りかけてくださっています。ですから、わたしたちは、神様の御前で、平気なふりをしたり、元気なふりをしたり、聴き分けがよいふりも、現状を冷静に対処しているふりもしなくていい。神様はぜんぶ受け止めてくださるからです。

今日朗読された102編の前半で、この歌い手の注ぎだす言葉は、ほんとうに、冷え冷えとした、おなしさを感じさせる絶望を歌っています。もう私は死にそうだ、心はカラカラに乾いて、食欲もない、体も干からびて、まるでひとりぼっちの鳥のようにさみしくて、眠ることもできない。こんな気持ちでいるのは、神様が私を見捨ててしまったからだ。

この歌い手は、前半ではこう歌っているんですね。さらに後半部分は、神さまへの賛美の言葉が多く出てきますが、同時に、言葉の端々に歌い手の苦悩が表れているのを感じます。24~25 節では、「私は衰えて、寿命は短くなった、神様がそうされたから。まだ人生の途中なのに。神様、私を死なせないでください。あなたの歳月は幾代もつづくのに」と自分自身の嘆きを神様に訴えています。ここでは、創造主なる神様の永遠性と、神に造られた人(わたし)のはかなさとが対比されているようにも思います。きっと歌い手の心の中には、自分に降りかかった災いへの恐れや絶望があり、しかし神がおられる、神を頼って平安を得たいと言う思いもあり、感情と理性が激しく入り乱れていたのではないかと感じさせられます。このような状態にあっても心の中の思いを言葉にして歌えるというのがすごいと思いますし、これが「歌い手」という存在が神にいただいている才能(賜物)かと驚きますが、ともあれ、神様が聴いていることを承知の上で、歌い手は賛美も絶望も恐れもすべて神様に吐き出しています。詩編は全体にこのような歌が数多く集められていますし、102編よりもっと過激な言葉で神や人に対する恨みつらみを歌っているものもありますよね。

このような「詩編」という書物は、祈りの具体的な手本だと思います。神様に対して隠し事をして無駄ですから、本当に洗いざらい、遠慮せずに恐れずに自分の感情や本心をぶつけられるかどうか。このことは、神を知り、自分を知り、そして神様との関係を築いてゆくなかで、とても大切なことだと思います。この歌を歌った人は、自分の絶望をありていに神様にぶつけるなかで、決して忘れてはならない神という存在を、必死にイメージしよう、思いにとどめようとしています。わたしは草のように枯れてゆく。そんな存在だ。だけど、神様はどうだろう。神様はどんなお方だったっけ。そうだ、神様はわたしを創造した方だし、永遠だし、そして、嘆く人を苦しみから解き放ち、安心して暮らすことができるようにしてくださるお方だ、神様に徹底的にす

がりついて、これを言っただけとかよくないとか、そんなことすら考えないで正直な気持ちをぶつけているうちに、神様の大きさ、深さ、永遠がよりわかって、希望も見えてくるのです。

14～17節を見る限り、おそらくこの人の背景には、エルサレム陥落と捕囚があると思われますが、この歌い手が抱えている苦悩は、歌っている時点では、具体的な解決の糸口すら見えていない状態です。それで最後の29節で、「あなたの僕らの末は住むところを得、子孫は御前に固く立てられるでしょう」と言ってますから、自分の代では、わたしの悲しみは解消されないかもしれないと予感しているのでしょう。それでも、私のあとの代でいつかきっと神様は、この問題、この苦しみを解決してくださると歌い手は信じます。なぜなら、私ははかなく消えてゆくとしても、神は永遠なのだから。最初はくじけた心を注ぎだしていた歌い手は、最後に神というお方の存在そのものが希望であることを思い出し、それだけでなく、歌い手自身も、わたしたちは賛美するために創造されたのだと、神の民としての使命を再確認するところまで、高く心を引き上げられてゆくのです。

深い嘆き悲しみを神に聞いていただく中で、神様がわかり、自分のはかない存在、限りある存在であることを知り、神様に希望を託すことができる。そして「そうだ、わたしは、わたしたち人間は、神様を賛美するために生まれてきたんだ」（19節）ということに気が付くのです。歌であり祈りである詩を紡ぎ出すこの「貧しい人」の内側に、どん底から神の光が注ぐ霊的な高みへと昇って行くダイナミックな変化が起きているのです。

福音書には、しばしばイエス様が、人の輪から離れて一人で寂しい場所で祈られたことが記されていますが、イエス様の胸の内にも、深い嘆きや絶望とも言える思いが沸くことはあっただろうと思います。どうせわたしは雑巾のように利用され搾り取られる人生を送って、最後は死ぬだけだ。そんなユダヤの民の苦悩を常に見聞きしておられたイエス様は、日々どんなに心がお疲れだったろうかと想像します。誰かの悩みや負の感情を受け止めるのは、とてもエネルギーがいることですから。それでも次の日にはまた、イエス様は神と人を愛して、人々の救いと希望となってくださいました。そしてまたお疲れになれば、神さまと二人きりの時間を持たれ、イエス様は祈りを通してどん底から高みへと昇って行かれます。現状を受け入れ乗り越え愛してゆく祈りの大きな力を、イエス様は日々体験されておられたのです。

わたしたちもイエス様に倣い、天の神さまに心を開いて、悩みや絶望や、どんな願いをもぶつけることが赦されています。イエス様は、人の弱さも苦しさもまるでご自分のことのようによく知ってくださっておられますから、私たちが天の神に語り掛ける時に「わたしの名によって、何でも祈って良いのだよ」と言ってくださってます。だから、祈る時に「こんなことを祈ってゆるされるだろうか」と遠慮する必要はありません。余談かもしれませんが、ユダヤ教では、詩編102編は断食の時に読むのだそうです。私も断食祈禱をしたことがあります。ある時、その時のことを人に話したら「それは神様に対するハンガーストライキだね、それって神様に対する態度としては、あまりにも生意気すぎるんじゃないの?」と言われてしまいました。なるほどハンガーストライキとは言い得て妙だなと思っています。実際にその時は、絶食してでも、何が何でも絶対に聞き入れてもらわなければならない祈りがあって、その時のことを思い出して思わず説教の題にしてしまったのですが、私としては本気で直談判のつもりで、遠慮も恥もない赤裸々な祈りをしました。

それから、時々、自分の中にあるどろどろ、もやもやしている思いを祈禱会で吐き出して、祈ってもらう時もあります。教会の仲間に、私の負の感情や後ろ向きな思いや迷いを聞かせていいものかと、二の足を踏みそうになる時もあるのですが、それでもなるべく丁寧に心をさらけ出していくと、私が言葉にできない思いを誰かが言葉にして祈ってくださることも多くて、思わず「それだ!」とうれしくなりますし、「イエス・キリストのみ名で祈ります」と言って全員がアーメンと言ってくださる寛容さにも触れて本当にほっとします。それで、どん底にいると思っていても、気が付いたら、すごく温かくまばゆい美しいお方に抱かれていると感じる自分に変化している。祈る喜びとはこういうことだと思わされます。今日読んだ詩編の歌い手も、永遠なる神

さまの頼もしさに自分をゆだねることができて、そして周りの人々が自分の想いに共感しながら聴いてくれているのを感じて、それは心強かっただろうと想像しています。

「祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しき人の詩」(1節)。

わたしたちには、神さまと二人きりの時に、また、同じ主を信じ、主を愛する仲間たちと共に、貧しき者として、心を注ぎだし、空っぽの所に神様からの満たしを求めて祈ることができる幸いがあります。いまこの教会も、教会として祈り求めている様々な問題・課題があることと思いますが、どうか祈りの課題を共に担い合い、その苦悩を共有し合い、「主よ、わたし(たち)の祈りを聞いてください。この叫びがあなたに届きますように」(2節)と祈り合う教会として歩み続けることができますように。また、さまざまな問題・課題の乗り越え方を、主イエス・キリストがみ言葉を通して示してくださっている福音の豊かさの中に見出す教会であり続けることができますように。

祈り

祈る幸いを教えてくださった主イエス・キリストの父なる神様

あなたが、わたしの・わたしたちの心の叫びに耳を傾けて、あなたの定めた時に最高のお答えをくださるお方であることを、感謝のうちに信じます。わたしたちがあなたに献げる祈りが、いつも真実なものでありますように。どんなことでも心を合わせて祈り合う群れとして歩めますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。